

# 社会人リカレント農業教育プログラムが受講生に及ぼす影響

菊川裕幸<sup>1\*</sup>・金本佑太<sup>2</sup>・黒野秀晃<sup>3</sup>・清田千絵<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 神戸学院大学現代社会学部

<sup>2</sup> 広島大学大学院人間社会科学研究科

<sup>3</sup> 神戸学院大学社会連携グループ

e-mail: ag19041@s.okadai.jp

## The Impact of a Recurrent Agricultural Education Program for Working Adults on Program Participants

Hiroyuki KIKUKAWA<sup>1\*</sup>, Yuta KANAMOTO<sup>2</sup>, Hideaki KURONO<sup>3</sup> and Chie KIYOTA<sup>3</sup>

<sup>1</sup> Faculty of Contemporary Social Studies, Kobegakuin University

<sup>2</sup> Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University

<sup>3</sup> Social cooperation group, Kobegakuin University

e-mail: ag19041@s.okadai.jp

### Summary

This study examined the effects of participating in the Rakuno Academy, an industry-government-academia collaborative recurrent agricultural education program launched by three sectors: universities, the Japan Agricultural Cooperatives (JA), and the government. The program provided 142 hours of classroom learning and practical training per year to 24 participants. Participants were surveyed three times—before, during, and after completing the program—to assess changes in their agricultural knowledge and skills, their satisfaction with the program, shifts in awareness regarding starting farming, and concerns or positive impressions related to the program. The results showed that agricultural knowledge, assessed on a four-point scale, increased significantly from  $2.2 \pm 0.8$  points before the program to  $2.6 \pm 0.5$  points after completion. Similarly, agrarian skills increased significantly from  $1.9 \pm 0.8$  points before the program to  $2.5 \pm 0.6$  points after completion. The average number of visits to the field per week was 1.7 during and increased to 1.8 after the program. There was little change in satisfaction with the training or awareness of starting farming during or after the program, with satisfaction remaining at "somewhat satisfied" and awareness at "somewhat improved." Regarding the desire to begin farming, about 90% of the participants answered "yes" both during and after the program when asked whether they wanted to rent farmland. After completing the program, participants voiced various concerns, including the need for individual effort to start farming, securing a distribution route for agricultural products, and receiving follow-up support and continued farmland rental. Conversely, when reflecting on the program, participants mentioned specific crops they wished to grow and expressed a desire to build connections with others. In the future, it will be necessary to develop a curriculum that meets the needs of participants and contributes to fostering new agricultural employment.

**Key words**: agricultural education program, industry-government-academia collaboration, motivation to become a farmer, new farmers, recurrent education  
農業教育プログラム, 産官学連携, 就農意欲, 新規就農, リカレント教育

---

2025年5月7日受付. 2025年7月6日受理.

\*投稿責任者.

人植関係学誌. 25 (1): 1-11. 2025. 論文 (原著論文).

## 緒言

我が国の農業を取り巻く環境は厳しい状況にあり、とりわけ農業者の減少・高齢化等の課題に直面している。農業経営体数は2010年の1,679千経営体が2023年には929千経営体に、基幹的農業従事者は2010年の2,054千人が2023年は1,164千人となり、いずれも年々減少傾向で推移していることに加え、平均年齢は年々上昇し、2023年で68.7歳となっている（農林水産省、2025）。

こうした現状を踏まえ、経営の継承や新規就農者の確保、人材育成等が求められているが、農業の新規参入に係る障壁として、農地取得の困難さ、農業技術の習得に時間を要すること、資金調達の困難さ、地域社会での信頼基盤の形成に時間を要すること等が挙げられてきた（稲本、1986）。これらの障壁は、「青年就農給付金」や「経営発展支援事業」のような様々な就農支援策や制度の緩和によって徐々に軽減されてきたものの、既存制度を活かした包括的な就農支援体制の確立は発展段階にあるといえる（片岡、2006）。2021年に新規就農者を対象に行われた「就農に際して苦労した点」についてのアンケート調査においても、上位の回答に「農地の確保（72.8%）」、「資金の確保（68.6%）」、「営農技術習得（57.7%）」が挙げられるなど（農林水産省、2023）、根本的な課題解決には至っていない現状が伺える。

一方で、労働者の「自律的・主体的かつ継続的な学び・学び直し」が重要とされ、「職場における学び・学び直し促進ガイドライン」が策定されるなど、労働者を取り巻く環境は急速に変化し、職業人生の長期化が社会的な関心を集めている（厚生労働省、2022）。そのなかで、社会人経験のある農業者のキャリア形成に関する社会的要請も高まりをみせており、農業経営者育成に向けたリカレント教育プログラムが開発されている（木下・木村、2014）。例えば、福井県にある「かみなか農楽舎」では新規就農者研修事業を実施し、毎年2～5人の受講生に対して2年間の研修が行われており、受講生が就農時に地域参入しやすいことや、地元集落の農地保全に大きな役割を果たした点等がメリットとして挙げられている（片岡、2006）。

岩手大学農学部による「いわてアグリフロンティアスクール」では、30～35人の認定農業者や新規農業参入者を対象として、年間234時間のカリキュラムを提供しており、受講生を対象としたアンケート調査では、農業経営者の能力開発に対して一定の効果がみられたことが報告されている（木下・木村、2014）。近年では、行政が主体となった就農プログラム「丹波市立農の学校」が誕生するなど、農業リカレント教育プログラムは広がりを見せている（丹波市、2024）。

しかしながら、こうしたプログラムの課題として、

講義内容が高度であり、農業の現場からかけ離れる場合があること、農業技術についての知識を持たない非営農者が授業についていけないケースが発生していること等が指摘されている（田中、2020）。

プログラムに対する受講者のニーズについてみると、新潟県では農業リカレント教育プラットフォームの構築が進められており、農業人材に関する調査が実施されている。その中で、農業人材が関心のあるリカレント教育の形式では「民間企業が提供する教育プログラム」、「産学連携を通じた学び直し」が、リカレント講座では求めるテーマは「栽培技術」、「生産管理」、「経営管理」が上位となっている（新潟県農業リカレント教育プラットフォーム事務局、2024）。そのため、プログラムのニーズとして、実施機関は産官学で構成され、受講内容は栽培から経営までを学べることが求められていることがわかる。

このように、農業リカレントプログラムの実施例は一定数あり、その効果が報告されているが、課題点として、受講後の調査はあるが、受講途中の調査は少ないことが挙げられる。

そこで本研究では、産官学連携リカレント農業教育プログラム（以下、プログラム）として、後述する「神戸ネクストファーマー制度」を利用し、神戸学院大学（以下、大学）、兵庫六甲農業協同組合（以下、JA）、神戸市の3者で立ち上げた「楽農アカデミー」を事例として取り扱い、受講前、受講中、受講後の3回でアンケート調査を実施し、プログラム受講による農業の知識や技術の変化、プログラムの満足度、就農意識の変化、プログラムの課題や評価できる点などをまとめた。

## 材料および方法

### 1. 楽農アカデミーの概要と提供したプログラム

楽農アカデミーは、神戸ネクストファーマー制度を利用して立ち上げたプログラムである。通常、新規就農に際して就農準備資金や農地を貸借するためには、都道府県等が認めた研修機関、先進農家、先進農業法人で概ね1年以上（1年につき概ね1,200時間以上）の研修が求められる。神戸ネクストファーマー制度は、働きながら100時間程度の農業研修を受けることで、100～1,000㎡未満の小規模な農地を借りることのできる神戸市独自の制度である（神戸市、2024）。楽農アカデミーは神戸市における多様な農業の担い手育成および将来の新規就農者確保のための学びの場の提供といった社会的要請によって、大学とJAが双方合意のもとで形成されたものである。

楽農アカデミー組織図を第1図に示した。楽農アカデミーの運営に主として携わったのは、大学からは教員1人、事務職員2人で、JAからはJA支店2人、

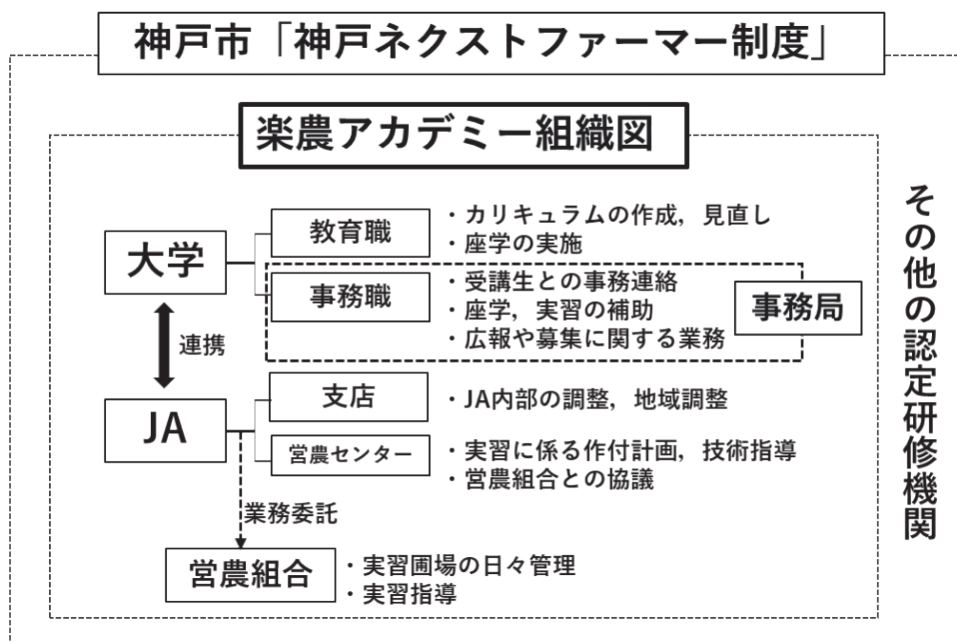


Fig. 1. Organizational chart of the Rakuno Academy.

第1図. 楽農アカデミーの組織図.

Table 1. Contents of lectures and practical training provided by the Rakuno Academy.

第1表. 楽農アカデミーで提供した座学と実習の内容.

開講月	内容	時間数		
		座学	実習	月合計
5月	・開講式，オリエンテーション	2	0	17
	・夏野菜の定植（座学・実習）	2	5	
	・夏野菜の栽培方法（座学），栽培管理（実習）	2	6	
6月	・土壌と肥料（座学），栽培管理，農薬散布（実習）	2	6	20
	・地域農業とくらし，JAの制度（座学）	4	0	
	・病害虫防除（座学），キュウリの収穫（実習）	2	6	
7月	・トマトの収穫，販売実習準備，販売実習（実習）	0	15	27
	・農業機械の取扱い（座学），トラクタ操作（実習）	2	8	
	・育苗，土壌分析（座学）	2	0	
8月	・秋冬野菜の準備（畝たて：実習）	0	2	2
9月	・秋冬野菜の栽培管理（座学），定植（実習）	2	2	9
	・新規就農の心構え（座学），栽培管理（実習）	2	3	
10月	・農業経営におけるSWOT分析，食品衛生（座学）	4	0	14
	・農作物と栄養素（座学），秋冬野菜の栽培管理（実習）	2	3	
	・先輩農業者の講話（座学），秋冬野菜の収穫（実習）	2	3	
11月	・販売実習（実習），秋冬野菜の収穫（実習）	0	11	22
	・受講後の計画発表（座学），面談	5	0	
	・農作物の調理・加工，食育活動（座学）	6	0	
12月	・圃場の片付け・整備（実習）	0	3	9
	・JA施設（育苗センター）見学，販売実習（実習）	0	2	
	・農作物のプランディング（座学）	4	0	
1月	・食のマーケティング，農福連携（座学），圃場整備（実習）	4	3	7
2月	・圃場の片付け（実習）	0	3	10
	・就農制度等のまとめ，申請書作成等，研修のまとめ（座学）	7	0	
3月	・研修の成果発表会（座学），修了式	5	0	5
受講時間		61	81	142



Fig. 2. Scenes from the first lecture and practical training.  
第2図. 初回の座学と実習の様子.

Table 2. Contents of questionnaires administered before, during, and after the program.  
第2表. 受講前, 中間, 受講後のアンケート内容.

質問	質問内容および回答選択肢	回答方法	実施時期
1	現在の農業に関する知識の程度	4段階評価	すべて
2	現在の農業に関する技術の程度 (質問1・2共通で, 4かなりある, 3ややある, 2あまりない, 1まったくない)	4段階評価	すべて
3	現時点で楽農アカデミーに期待すること 楽農アカデミーで習得できたこと (農業の知識や技術の習得, 受講生同士のネットワーク, 農業以外の知識や技術の習得, 心身の健康増進)	選択式	受講前・中間 受講後
4	印象に残っている実習 (上位5件)	自由記述	中間・受講後
5	農場への訪問回数	週あたりで回答	中間・受講後
6	楽農アカデミーの満足度とその回答理由 (4かなり満足, 3やや満足, 2やや不満, 1かなり不満)	4段階評価/ 自由記述	中間・受講後
7	楽農アカデミーの受講による就農意識の変化とその回答理由 (5かなり高まった, 4やや高まった, 3変化なし, 2やや低下した, 1かなり低下した)	5段階評価 /自由記述	中間・受講後
8	農地貸借の希望 (有, 無)	選択式	中間・受講後
9	希望する農地面積 (8で無と回答した人は将来希望する農地面積)	自由記述	中間・受講後
10	栽培を希望する作物	自由記述	中間・受講後
11	楽農アカデミーの受講を振り返っての課題点	自由記述	受講後
12	楽農アカデミーの受講を振り返っての意見や感想	自由記述	受講後

営農センター2人の合計7人であった。

2022年8月よりカリキュラム案を作成し, 大学側は教員の専門分野から座学の内容を決め, JAは実習のための作付け計画, 圃場の整備等の管理計画を決めた。

同年11月にカリキュラム案の協議, 修正を行い, 2023年1月に事業実施のために神戸市ネクストファーマー制度審査会に書類提出し, 認可を得た。同年2月に楽農アカデミーの公募を開始し, 説明会を開催した。最終的に応募のあった24人全員に対し, 同年3月に面談を行い, 全員を受講生として確定した。同年5月には事前オリエンテーション, 開講式を経て, 1回目の座学と実習を行った(第2図)。その後は, 第1表のようなスケジュールで座学と実習を提供した。関係者の役割は, 座学は大学教員が, 実習はJA職員

と営農組合に所属する農家が担当した。

講座は概ね土曜日に月2日程度実施し, 座学は2時間, 実習は3時間程度とした。座学の実施場所は大学講義室とし, 実習は大学から車で10分程度の兵庫県神戸市西区伊川谷町井吹に位置する300㎡と400㎡の圃場を2筆使用した。圃場は受講者全員が実習で利用する共同スペースのほかに, 1人あたり20㎡程度の自由に栽培活動が行えるフリースペースを設けた。圃場は開講日以外も自由に立ち入ることが可能であり, 受講生は自宅から大学や圃場まで自家用車等で通った。

## 2. 調査の概要

受講生には2023年5月11日に受講前アンケート, 8月26日に中間アンケートをそれぞれ対面にて, 修了式後, 2024年3月2~31日まで郵送による受講後アンケートの計3回のアンケート調査を実施した(第



Table 3. Attributes of the participants.  
第3表. 受講者の属性.

項目		人数	% (年齢は歳)
性別	男性	16	66.7
	女性	8	33.3
年齢	男性		51.1 ± 8.5
	女性		53.8 ± 10.6
農業経験	有	19	79.2
	無	5	20.8
職業	会社員	13	54.2
	自営業	2	8.3
	パート	4	16.7
	無職	5	20.8
受講のきっかけ	農業技術の習得	16	66.7
	新規就農の準備	8	33.3
受講後の展望	新規就農	9	37.5
	半農半X	9	37.5
	自家消費	4	16.7
	CSA (地域支援型農業)	2	8.3

2表)。それぞれの回答率は受講前24人(100%)、中間24人(100%)、受講修了後(以下、受講後)19人(79.2%)であった。いずれの回も共通項目として「現在の農業に関する知識・技術の程度」を4段階評価で尋ねた。

### 1) 受講前アンケートと受講者属性

受講生24人全員に対して基本属性として性別、年齢、農業経験の有無、職業、受講のきっかけ、受講後の展望を尋ねた。共通項目に加えて、「現時点で楽農アカデミーに期待すること」を尋ねた。

受講生の属性を第3表に示した。性別は男性が16人(66.7%)、女性は8人(33.3%)となり、平均年齢は52.9 ± 9.8歳(男性51.1 ± 8.5歳、女性53.8 ± 10.6歳)となった。農業経験は「有」が19人(79.2%)で、職業は「会社員」が13人(54.2%)と最も多かった。受講のきっかけは「農業技術の習得」が16人(66.7%)で、受講後の展望は「新規就農」と「半農半X」が最も多く、いずれも9人(37.5%)であった。ここでいう「半農半X」とは、現職を継続しながら営農活動を新規に行う意思のある受講生のことを示している。

### 2) 中間アンケート

共通項目および受講前アンケートの内容に加え、「印象に残っている実習(上位5件)」、楽農アカデミー開講日を除く「農場への訪問回数(週あたり回数)」、「楽農アカデミーの満足度(4段階評価)とその回答理由」、「楽農アカデミーの受講による就農意識の変化(5段階評価)とその回答理由」を尋ねた。なお、就農意識

の変化は、受講前から就農を既に意識している受講生もいたため、変化なしを加えた5段階とした。

### 3) 受講後アンケート

2024年3月2日の修了式以降から3月31日を回答期限として設け、郵送によりアンケートを実施、回収した。共通項目、中間アンケートの内容に加えて、「楽農アカデミーで習得できたこと」、「楽農アカデミーの受講を振り返っての課題点」および「楽農アカデミーの受講を振り返っての意見や感想」を尋ねた。

### 4) 倫理的配慮

倫理的配慮として、対象者に対し、研究の内容やアンケート調査等の説明について、書面を提示して口頭で行い、書面にて同意を得た。その際、対象者にはアンケート調査やインタビューの回答について、一切他人に開示することはないこと、受講認定等に影響がないことを伝えている。

### 3. 統計処理

共通項目について、受講前、中間、受講後の比較のために、ウィルコクソンの符号付き順位検定を行った。検定を実施した項目のみ、同一対象者の受講による効果を直接評価するため、すべての回答が得られた19人を対象とした。得られたデータはノンパラメトリックデータとして処理したが、本文中には平均値 ± 標準偏差で示した。検定は、両側検定で( $p < 0.05$ )の場合に有意差ありとした。統計処理には統計ソフトエクセル統計7.0 for Windows(エスミ社製, 2024年版)を用いた。

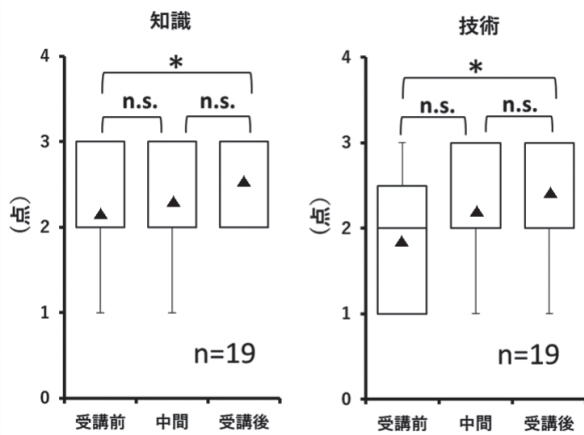


Fig. 3. Changes in agricultural knowledge and skills before and after completing the program.

第3図. 受講前と受講による農業の知識・技術の変化.

\* :  $p < 0.05$ , n. s. は有意差なし.

注: 図中のバーは最大値と最小値を, ▲は平均値を示した.

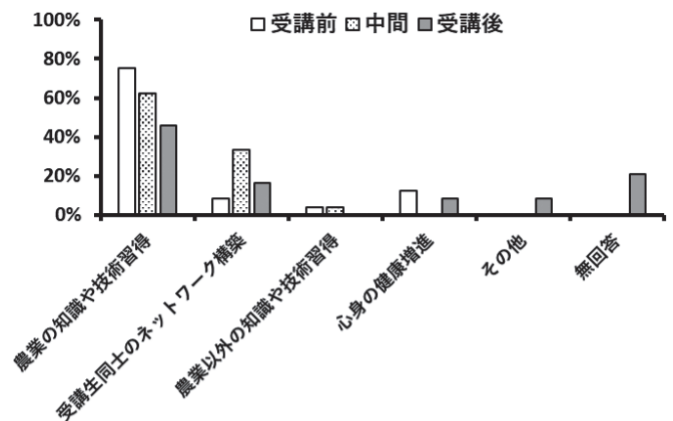


Fig. 4. Expectations from the Rakuno Academy and insights gained after completing the program.

第4図. 楽農アカデミーに期待することおよび受講後に習得できたこと.

Table 4. Number of farm visits, satisfaction with the training, and changes in awareness of starting farming.  
第4表. 圃場への訪問回数, 研修の満足度および就農意欲の変化.

項目	中間	受講後	p値
圃場への週あたりの 訪問回数 (回±標準偏差)	1.7±0.8	1.8±1.1	0.35
研修の満足度 (点±標準偏差)			
1~4点の4段階評価で尋ねた得点	3.2±0.7	3.4±0.8	0.36
就農意識 (点±標準偏差)			
1~5点の5段階評価で尋ねた得点	4.4±0.8	4.4±1.0	0.93

受講後アンケートの自由記述については、得られたテキストをデータクリーニングしたのち、KH Coder (Ver.3.Beta.07b) を用いて共起ネットワーク分析を行った。分析にあたり、出現数による語の取舍選択は、最小出現数を2に設定し、描画する共起関係の絞り込みは描画数を60に設定した。文章の抜粋にあたっては、KH CoderのKWICコンコーダンス機能を用いて、それぞれの語がどのように用いられているのか文脈を探った。

## 結果

### 1. 楽農アカデミー受講による受講生の変化

農業に関する知識・技術の変化を第3図に示した。知識は受講前の $2.2 \pm 0.8$ 点から受講後には $2.6 \pm 0.5$ 点と有意に増加した。技術も同様に、受講前の $1.9 \pm 0.8$ 点が受講後には $2.5 \pm 0.6$ 点と有意に増加した。知識・技術のいずれも受講によって点数が増加すること

がわかった。なお、知識・技術いずれも受講前と中間、中間と受講後には有意な差はみられなかった。

受講前および中間において楽農アカデミーで期待すること、受講後に習得できたことを第4図に示した。

受講前、中間で期待していたこと、受講後に習得できたことについて、いずれも「農業の知識や技術習得」が最も多かった。次いで、受講前は「心身の健康増進」が3人(12.5%)、中間は「受講生同士のネットワーク構築」が8人(33.3%)となり、受講後は無回答を除くと、「受講生同士のネットワーク構築」が4人(16.7%)となった。

圃場への週あたりの訪問回数を第4表に示した。中間は $1.7 \pm 0.8$ 回、受講後(中間アンケート以降受講修了まで)は $1.8 \pm 1.1$ 回と0.1回増加した。受講期間を通じて、楽農アカデミーの実習日を除き、週あたり約2回の圃場への訪問があることがわかった。

印象に残っている実習について、回答数上位5件を

Table 5. Top five most memorable practical training components.  
第5表. 印象に残っている上位5件の実習内容.

中間 (n=24)			受講後 (n=19)		
実習内容	回答数	%	実習内容	回答数	%
野菜類の定植	11	45.8	販売実習	8	42.1
野菜類の管理作業	8	33.3	トラクタ操作	5	26.3
販売実習	7	29.2	野菜類の管理作業	5	26.3
キュウリ収穫	5	20.8	野菜類の定植	5	26.3
トラクタ操作	5	20.8	育苗センター見学	4	21.1
動力噴霧器による農薬散布	5	20.8			

Table 6. Reasons for satisfaction with the training (free-text responses).  
第6表. 研修の満足度の理由 (自由記述).

分類	中間 (n=23)	受講後 (n=18)
農業の知識 ・技術習得	・ 農業についてわからなかったことが一定わかるようになった。(6) <sup>2</sup> ・ 農業未経験者でも農業の体験がリアルに行えた。(2) ・ 楽しく学ぶことができた。	・ 基礎的な知識がないまま参加したが、一定の学習ができた。 ・ 普段であれば経験できない(農業)体験ができた。 ・ 野菜栽培の体系的な知識が得られた。 ・ 講座内容、カリキュラムレベルともに非常に充実していた。(2)
人間関係	・ 他の受講生と協力的に過ごせた。 ・ 他の受講生と良好な関係構築や意見交換ができた。(4)	・ 自分に欠けていた人間関係の構築ができてよかった。 ・ いろいろな人とのつながりができ、意見交換ができた。(3)
不満・課題	・ 全体的な営農についての説明がないので実際就農するための全体像が全く描けない。 ・ 受講後に直面する問題(地域とのコミュニケーション、営農資金)に対しての情報が少なかった。 ・ 植物、土壌に関する知識をもっと深めたかった。 ・ 実習の時間を増やしてほしい。 ・ 実習期間が短い。	・ 実習に使用する資材の準備や圃場整備などが(JAにより)既に行われていたため、ゼロから学べなかった。簿記を学びたかった。 ・ もっと期待していた。 ・ 栄養系の内容よりも、農学系の内容がもっとあればよかった。 ・ 早い段階で同期の人達と話したり、意見を交わす機会を設け、親睦を深められたらもっと良かった。 ・ 実習の時間を増やして欲しかった。 ・ 受講後の農地探しに苦労している。
事務局運営	・ JA職員の知識や経験が豊富であった。(2)	・ 講師の知識や経験が豊富であった。
今後の方向性	・ 自分の目指す農業スタイルと異なる内容を学び、今後の営農スタイルがやや見通せるようになった。	・ 受講後、農地に利用権設定し、引き続き実質的な営農経験ができた。
その他	・ 他の研修機関との比較ができないのでわからない。	・ 様々な体験が新たなきっかけにつながった。

<sup>2</sup>( )内の数値は回答数。文章中の( )は著者が補足した。

Table 7. Changes in awareness of starting farming as seen from the free-text responses.  
第7表. 就農意識の変化.

分類	中間 (n=21)	受講後 (n=17)
意欲・自信	・ (受講によって)意欲や自信につながった。(2) <sup>2</sup> ・ もともと意欲は高かったので変化はない。(3) ・ 経験がなく、不安であったが周囲の協力もあり、農作業がとても楽しい。(2) ・ 神戸で農業と関わる仲間が増え、自信につながった。(2) ・ 具体的なイメージができ、現実と理想のギャップや課題の方向性がしっかりと直視できるようになった。 ・ 大変ではあるが収穫の際の充実感が大きかった。野菜の成長が楽しみで、自分に向いていると感じた。(2)	・ 自分で何とか営農できそうな手ごたえを感じた。 ・ 農業は面白いと感じた。 ・ 受講前に想定したこと、していなかったことを経験し、自分なりに乗り越えられたことで自分にも自信がついた。 ・ 受講前からのモチベーションは変化ないが、知識や人脈が増えたので良かった。 ・ 受講前のイメージが具体化した。 ・ 農業従事者の仕事の流れが大体分かったので、(就農が)怖くなくなった。 ・ 具体的にいつ頃就農できるというプランが決まってやる気になった。
将来展望	・ ミニマム農業(最低限の農地と設備で農業経営を行う)の実現可能性をイメージすることができるようになった。 ・ いずれは本格的に自然農法でやってみたいと思っている。 ・ 雇用という形で、修行することも検討している。 ・ 収入はかなり厳しく、副業も視野に入れる必要がある。	・ 自給自足でペットと泊まれる民泊、その近くでごはん屋さんをしたい。 ・ 「自然農」でやっていく意思が明確に固まった。 ・ 近隣の農地が借りられる。(2) ・ JAの方や農家の方もサポートしてくれる。
不安・課題	・ 就農への気持ちは高まったが、いろいろなことを考えるとハードルが高い。(2) ・ 現実にかかなりの資金が必要なのがあった。	・ 農業は簡単で甘いものではない。 ・ (就農は)難しい。
その他	・ 農業の現状が把握できた。(2)	・ (受講は)就農への明確な道筋であった。 ・ 条件の良い農地を紹介してもらえた。(2)

<sup>2</sup>( )内の数値は回答数。文章中の( )は著者が補足した。

Table 8. Desire to start farming mid-program and farming status after the program.  
第8表. 中間の就農希望および受講後の就農の状況.

項目	中間 (n=24)		受講後 (n=19)		
	人数	%	人数	%	
農地貸借の希望	有	22	91.6	17	89.5
	無	1	4.2	2	10.5
	無回答	1	4.2	0	0.0
希望する農地面積	100㎡未満	1	4.2	1	5.3
	100～500㎡未満	10	41.7	7	36.8
	500㎡以上	11	45.8	10	52.6
	無回答	2	8.3	1	5.3
希望する栽培作物 (複数回答可)	野菜類	20	83.3	18	94.7
	豆類	1	4.2	5	26.3
	芋類	2	8.3	5	26.3
	果樹類	3	12.5	2	10.5
	水稲	2	8.3	2	10.5
	無回答	1	4.2	0	0.0

第5表に示した。中間は「野菜類の定植」が11件(45.8%)で最も多く、次いで「野菜類の管理作業」が8件(33.3%)、「販売実習」が7件(29.2%)となった。受講後は「販売実習」が8件(42.1%)と最も多く、次いで「トラクタ操作」、「野菜類の管理作業」、「野菜類の定植」がいずれも5件(26.3%)となった。

## 2. 楽農アカデミーの満足度評価とその理由

研修の満足度とその回答理由を第4表および第6表に示した。研修の満足度に有意な差はないが、中間で $3.2 \pm 0.7$ 点から受講後 $3.4 \pm 0.8$ 点に0.2点の増加がみられた。

満足度の理由について、「農業の知識・技術習得」、「人間関係」、「不満・課題」、「事務局運営」、「今後の方向性」、「その他」に分類した。中間の自由記述をみると、農業の知識・技術習得に関する回答が9人と最も多く、「農業についてわからなかったことが一定わかるようになった」の回答が6人あった。人間関係に関する回答は5人あり、「他の受講生と良好な関係構築や意見交換ができた」の回答が4人あった。不満・課題の回答は5人からあり、就農に関する説明不足や座学・実習に関する要望(実習期間や実習時間を長くしてほしい)が挙げられた。

続いて受講後の自由記述をみると、農業の知識・技術習得に関する回答は5人が挙げ、その内容は概ね肯定的であり、「講座内容、カリキュラムレベルが充実していた」といった意見が2人から挙げられた。人間関係に関する回答は4人あり、「いろいろな人とのつながりができ、意見交換ができた」との回答が3人から挙げられた。さらに、不満・課題の回答が6人と最も多く、座学や実習内容に関する不満や受講後の農地探しへの苦労等が挙げられた。

## 3. 受講生の就農意識の変化

就農意識の変化とその回答理由を第4表および第7表に示した。就農意識の得点は中間で $4.4 \pm 0.8$ 点、受講後も $4.4 \pm 1.0$ 点と変化はなかった。就農意識の

理由については、「意欲・自信」、「将来展望」、「不安・課題」、「その他」に分類し、各項目の変化を示した。

意欲・自信に関する回答は、中間で12人と最も多く、「もともと意欲は高かったので変化はない」の回答が3人あり、受講によって「意欲や自信につながった」人や「農業と関わる仲間が増え、自信につながった」人がそれぞれ2人いた。受講後も7人の回答があり、農への手ごたえ、農業の面白さやイメージの具体化などが挙げられ、意欲や自信が向上したとみられる回答があった。

将来展望は中間で4人が回答し、ミニマム農業(最低限の農地と設備で農業経営を行う)の実現可能性や自然農法の希望、(農家への)修行や副業が挙げられたが、受講後には5人が回答し、「近隣の農地が借りられる」と2人が回答し、将来の展望を明確に答えた。不安・課題は中間では3人が回答し、就農へのハードルが高いことを挙げ、受講後も同様に農業の難しさが挙げられた。

## 4. 中間の就農希望および受講後の就農の状況

中間の就農希望および受講後の就農の状況を第8表に示した。農地貸借の希望は「有」の回答が中間は22人(91.6%)、受講後は17人(89.5%)で大きな変化はみられなかった。希望する農地面積は、中間、受講後いずれも「500㎡以上」が最も多く、それぞれ11人(45.8%)、10人(52.6%)となり、次いで「100～500㎡未満」で、それぞれ10人(41.7%)、7人(36.8%)となった。

栽培作物の希望は中間、受講後いずれも「野菜類」が最も多く、それぞれ20件(83.3%)、18件(94.7%)となった。中間では次いで「果樹類」が3件(12.5%)となったが、受講後は「豆類」、「芋類」がいずれも5件(26.3%)となった。

## 5. 楽農アカデミー受講後の課題点および受講者の所感

楽農アカデミー受講後に尋ねた課題点の自由記述データを共起ネットワーク化した(第5図)。総抽出語



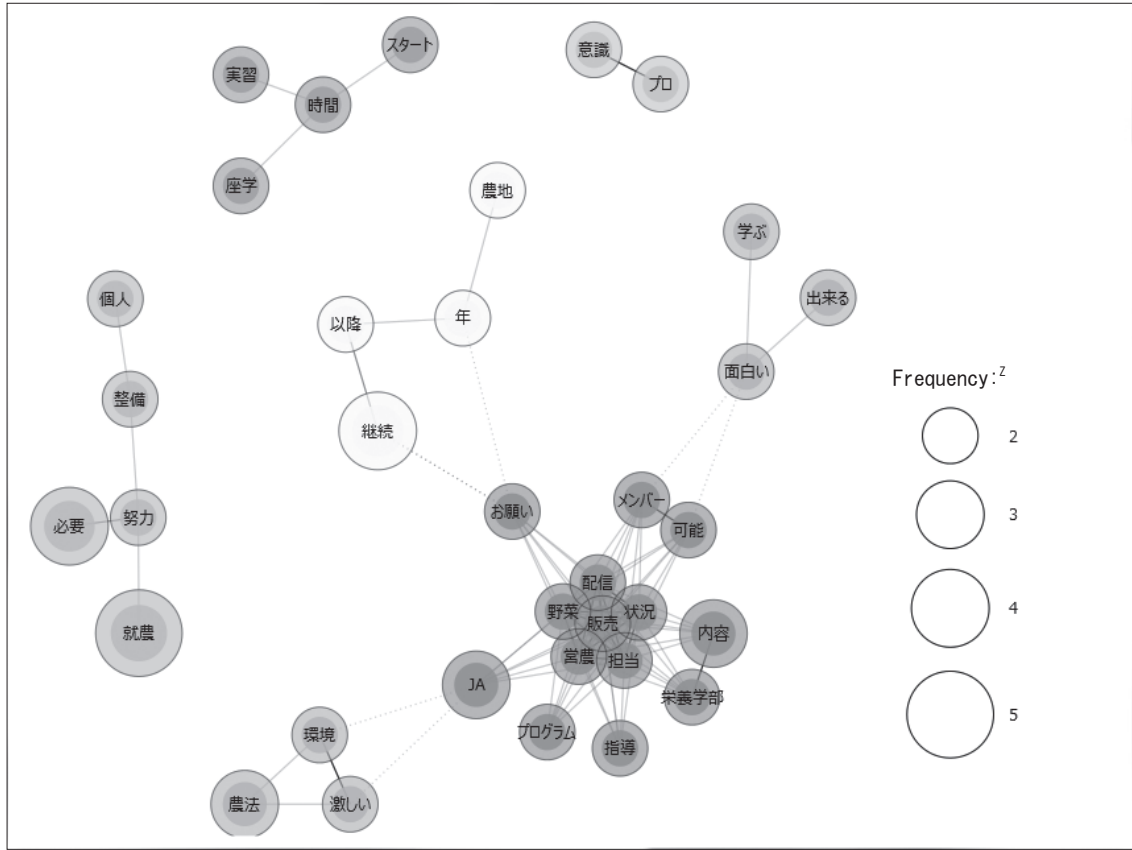


Fig. 5. Co-occurrence network diagram of responses identifying concerns after reflecting on the program.  
 第5図. 受講を振り返って課題と感じた回答の共起ネットワーク図  
<sup>2</sup> 回答に表出する頻度 (Frequency) の多さに応じて語を囲む円が大きくなる.

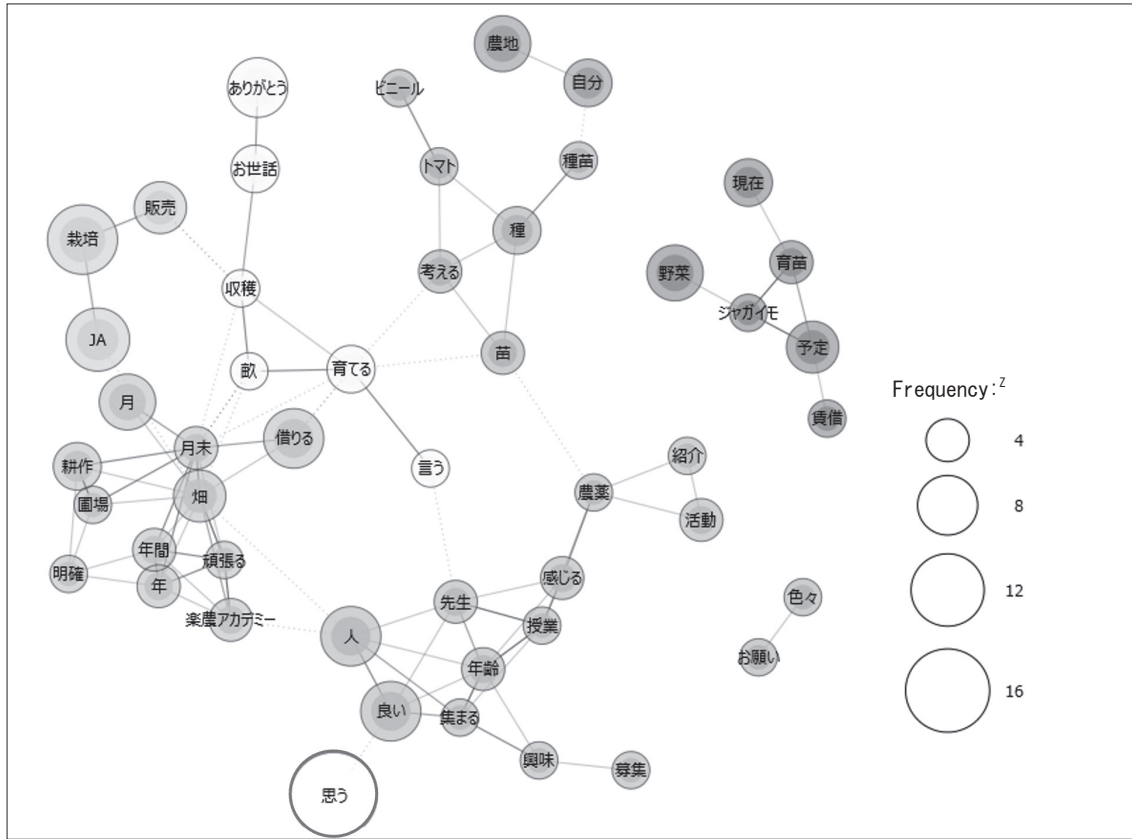


Fig. 6. Co-occurrence network diagram of responses expressing opinions and impressions after reflecting on the program.  
 第6図. 受講を振り返っての意見や感想の回答の共起ネットワーク図.  
<sup>2</sup> 回答に表出する頻度 (Frequency) の多さに応じて語を囲む円が大きくなる.

数は1,032語（異なり語数391語）が抽出された。第5図の左側には、「就農」が出現し、「就農」には個人の「努力」が「必要」であることや、様々なハードルを「個人」の「努力」で乗り越えることが「必要」との記述がみられた。図の中心には「継続」が出現し、受講後のフォローの「継続」希望や、斡旋された農地の「継続」、楽農アカデミー自体の「継続」を希望する記述がみられた。図の右下には「販売」、「野菜」、「営農」、「JA」といった語のまとまりがあり、具体的には「野菜」の「販売」を大学でできないかといった要望や、「JA」の「営農」指導員や「営農」組合との関わりを求める記述がみられた。また、内容が難しいことが課題ではあるが、「栄養学部」の授業「内容」が興味深い内容であったとの記述もみられた。

続いて、楽農アカデミーの受講を振り返っての感想等の自由記述データを共起ネットワーク化した（第6図）。総抽出語数は2,233語（異なり語数677語）が抽出された。第6図の左上には、「栽培」、「販売」、「JA」が出現し、具体的には様々な作物の「栽培」を計画していること、収穫物の「販売」を「JA」の直売所等で予定していること、「JA」職員による農地斡旋や技術面でのサポートに関する感謝の記述がみられた。図の上部と右上には「トマト」や「ジャガイモ」といった具体的な作物名や、「種苗」、「苗」、「野菜」、「育苗」といった栽培に関するキーワードが出現した。「農地」については、貸借した「農地」で就農する、「農地」を貸借して農業委員会で手続き中といった記述がみられた。図の左下には「耕作」、「月」、「畑」、「借りる」といった語のまとまりが出現し、具体的には「畑」を「借りる」タイミングの「月」に関する記述、「耕作」の条件や「耕作」管理の情報を受講者どうしで共有できる仕組みの構築を要望する記述がみられた。図の中央には「人」、「良い（良かった）」、「年齢」、「集まる」といった語のまとまりがみられた。具体的にはいろいろな「人」とのつながりが「良かった」こと、「年齢」や職業が違う「人」たちが「集まる」ことができた、「年齢」や性別を問わずみんなが仲良くできたといった記述がみられた。

## 考 察

本研究では、社会人リカレント農業教育プログラム「楽農アカデミー」の受講者を一般公募し、受講が決定した24人に対して、受講前、中間、受講後の3回に分けてアンケート調査を実施し、受講による農業の知識や技術の変化やプログラムの満足度、就農意識の変化等を明らかにした。プログラムは座学と実習で構成され、年間142時間実施された（第1表）。

プログラム受講前と比べ、プログラム受講後は農業の知識・技術いずれも有意に増加しており（第3図）、

農業経験の有無や受講後の展望等が異なる受講生が集まっても、リカレント教育として一定の効果があったと考えられる。

楽農アカデミーに期待することは、「農業の知識や技術習得」が受講前、中間、受講後いずれも最も多かったが、「受講生同士のネットワーク構築」を期待する受講生も中間で8人、受講後は4人いた（第4図）。藤田（2003）が大学農場で実施した社会人教育においては、受講生同士の年齢・職種を越えた仲間意識が芽生えたことが報告されている。本研究においても、属性は異なっても、受講生同士のつながりを求める人が一定いることがわかった。このことから、プログラムの中で、一方的な講義や実習を提供するのではなく、受講生同士がコミュニケーションをとれる機会を設ける必要があると考えられた。

農場への訪問回数は中間と受講後で大きな変化はみられなかった（第4表）。これは、多くの受講生が生活リズムを変えることなくプログラムを継続し、プログラム内容が季節で変化しても、モチベーションを維持できたことが伺える。印象に残っている実習内容は、プログラム前半は「野菜類の定植」や「野菜類の管理作業」といった栽培活動に興味関心が高かったが、次第に収穫物を販売する機会等が増えるにつれ、売り上げといった形で成果がみられる「販売実習」に変化した（第5表）。

研修の満足度は、中間、受講後でほぼ変化はなかった（第4表）。自由記述をみると、中間では新たな農業の知識や技術習得ができたことが高評価につながったが、受講後の展望や課題に関する情報が不足したこと、実習期間や実習時間の不足が満足度を低下させた要因と考えられた。プログラム後半では、先輩農業者の講話や就農制度等のまとめに関する座学を取り入れたことで、就農後の不安や課題に関する記述はみられなくなったが、実習時間の増加や座学の内容に関する不満が挙げられた（第6表）。このことから、受講後早い段階で就農に向けたガイダンスの実施やプログラムに対する受講生の意見を聞く機会を設けることで、満足度向上につながると考えられた。

就農意識の変化は、中間、受講後いずれも4.4点となり、「かなり高まった」に近い評価となった（第4表）。これは、受講者の就農意識が受講前から高く、その状態が維持されたことが示唆される。自由記述をみると、中間では収入やコスト、就農へのハードルが高いとの言及があったが、意欲・自信のある回答が21件中12件と多かった。受講後は収入やコストの言及はなく、就農への意欲や自信、期待感のある回答が17件中7件あり、将来展望においても、農地貸借ができることや具体的な方向性が決定した記述がみられた（第7表）。このことから、本プログラムでは就農意識を低下させることなく、維持できることがわかった。一方、

就農への不安感を抱く受講生もいるため、早期の面談の実施も重要であると考えられた。

受講を振り返っての課題として、就農に向けた一定の努力が必要であり、ハードルも高いこと、受講後のフォローの継続希望や農地の継続的な利用(契約更新)などが挙げられ(第5図)、受講後にJAや大学関係者と協議できるフォロー体制の構築が求められていると考えられた。

状況は異なるが、農業大学校の非農家出身者の新規就農の調査では、2年間の学習だけでは実際の起業は困難で、様々な新規参入者を想定し、新たな参入者支援対策が必要であるとされている(三代, 2012)。楽農アカデミーは様々な属性の人が受講しており、受講期間や時間も限られていることから、新規就農を円滑に進めるために、JAや行政による綿密な支援が必要である。

続いて、受講を振り返っての意見や感想では、様々な作物の栽培計画や農産物の販売予定、受講者のネットワークに関する前向きな記述がみられ(第6図)、受講によって得られた農業の知識や技術、受講生同士のネットワークの活用が伺えた。

中間の就農希望と受講後の就農の状況は、農地貸借の希望(受講後はすでに農地が決まっている人も有とカウント)、希望する農地面積、栽培作物に大きな変化はみられなかった(第8表)。これは、就農意識と同様に、受講前もしくは受講開始後の比較的早い段階で、受講後の営農状況についてシミュレーションができていたことが伺えた。これらのことを総合すると、プログラム全体としては、受講開始後早い段階でグループワーク等を設定し、受講者同士の交流機会を確保し、先輩農業者やJA職員等との交流を行う、不安払拭のために、大学職員やJA職員等との面談を行うことが望ましいと考えられる。

今後は、受講生の農業経験の有無やこれまでの農業との関わりなどを踏まえたプログラムを考案し、受講による学びや変化、プログラムへの不安、不満、要望などを聞き取る仕組みが必要である。

## 摘 要

本研究は、大学、JA、行政の三者で立ち上げた、産官学連携リカレント農業教育プログラム「楽農アカデミー」の受講生24人を対象に、年間142時間の座学と実習を提供し、受講による効果を検証した。受講者には受講前、受講中間、受講修了後の3回でアンケート調査を実施し、プログラム受講による農業の知識や技術の変化、プログラムの満足度、就農意識の変化、プログラムの課題や評価できる点などをまとめた。結果、4段階評価で尋ねた農業の知識は、受講前の $2.2 \pm 0.8$ 点から受講修了後には $2.6 \pm 0.5$ 点と、農

業の技術は、受講前の $1.9 \pm 0.8$ 点が受講後には $2.5 \pm 0.6$ 点とそれぞれ有意に増加した。受講開始後の圃場への週あたりの訪問回数は受講中間1.7回、受講修了後1.8回で、研修の満足度ならびに就農意識の変化は受講中間、受講修了後もほぼ変化はなく、満足度は「やや満足」、就農意識は「やや高まった」状態が維持されていた。新規就農について、受講中間、受講修了後いずれも農地貸借の希望は約90%の受講者が「有」と回答した。受講修了後の課題としては、就農には個人の努力が必要であること、農産物の販路確保、受講後のフォローや農地貸借の継続を希望する意見がみられた。一方、受講を振り返っての意見や感想には、様々な栽培希望作物の名前や人とのつながりが挙げられた。今後は受講生ニーズに応えたカリキュラム編成等を行い、新規就農につながるプログラム作りが求められる。

## 引用文献

- 藤田 智. 2003. 大学農場における社会人教育の意義(第1報) 就農準備校について. 研究紀要 恵泉女学園園芸短期大学 34: 15-21.
- 稲本志良. 1986. 農業における新規参入—その背景と条件整備の考え方—. 農林金融 農林中金総合研究所編 9(12): 857-859.
- 片岡美喜. 2006. 農業への新規参入者に対する教育・研修システムと地域受け入れ体制に関する一考察. 農林業問題研究 42(1): 109-114.
- 木下幸雄・木村伸男. 2014. 農業経営者向けリカレント教育プログラムの開発と実践. 農業経営研究 52(3): 12-19.
- 神戸市. 2024. 神戸ネクストファーマー制度実施要綱. 2024. 4. 1. (調べた日付). <https://www.city.kobe.lg.jp/documents/46389/kobenextfarmer-jisshiyoukou.pdf>
- 厚生労働省. 2022. 職場における学び・学び直し促進ガイドライン. 2024. 3. 1. (調べた日付). <https://www.mhlw.go.jp/content/11801000/000957888.pdf>
- 三代陽介. 2012. 農業大学校の非農家出身者の新規就農を巡って. 熊本大学社会文化研究 10: 241-263.
- 新潟県農業リカレント教育プラットフォーム事務局. 2024. 農業人材に関する一次調査調査結果. 2024. 6. 23. (調べた日付). <https://tsunagu.pref.niigata.lg.jp/pdf/20240226.pdf>
- 農林水産省. 2023. 令和4年度食料・農業・農村の動向 令和5年度食料・農業・農村施策. 2024. 3. 1. (調べた日付). [https://www.maff.go.jp/j/wpaper/w\\_maff/r4/pdf/zentaiban.pdf](https://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/r4/pdf/zentaiban.pdf)
- 農林水産省. 2025. 令和5年度食料・農業・農村白

書(令和6年5月31日公表). 2025. 4. 11. (調べた日付). [https://www.maff.go.jp/j/wpaper/w\\_maff/r5/attach/pdf/index-2.pdf](https://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/r5/attach/pdf/index-2.pdf)

田中茉莉子. 2020. リカレント教育の経済への影響. 日本労働研究雑誌 721 : 51-62.

丹波市. 2024. 丹波市立農(みのり)の学校が開校しました!. 2024. 6. 23. (調べた日付). <https://www.city.tamba.lg.jp/soshiki/norinshinkoka/gyomuannai/6/2/1/3137.html>